

平成 29 年度学校評価（実施報告）

	視点	4年間の目標 平成28年度策定	1年間の目標	取組の内容		校内評価	校内評価	学校関係者評価	総合評価	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	① 課題探究を核とした科学的リテラシーの育成、グローバル教育の研究、思考力・判断力・表現力の育成を目指した授業研究と進学実績を導き出せる教育課程の研究を行う。 ② 主体的に学ぶ態度の育成を通し、自己決定力を向上させる。	① 主体的、対話的で深い学びを実現するための授業研究に、通常の授業、探究活動、英語教育の充実などを通して多角的に取り組む。 ② 探究活動などを通して、主体的に学ぶ態度を育てる。	① 教科研究会議を設置し目的と手立て・評価の研究を行う。また、SSHの最終年度としてより充実した取組みを行い、継続指定を目指す。更に、GTECの継続的受験により、英語力の向上と生徒の意識向上を目指す。 ② 主体的な学びを推進するため、授業や探究活動において生徒が自らの考えを表現する機会を増やす。	① 授業研究発表会における生徒の評価が目的に合うものであったか。生徒の探究力及び英語による表現力が向上したか。 ② 生徒による授業評価項目4において、生徒が主体的に取り組む場が増加したか。	・6教科の授業研究を実施し、全教科でルーブリックV評価を実施した。教科による違いはあるが、80%以上が良好な評価だった。 ・「英語運用能力」の良好な回答は、20.0%から55.6%に上昇した。(平成27年度1年4月と3年9月比較) ・授業互見の習慣が定着し、提出されたフィードバックシートは50件。 ・GTECの受験に積極的になり、100%の受験率となった。 ・GTECの結果分析により、英検準2級以上に相当する生徒は全学年とも約97%。 ・GTEC Speakingの受験2回目。昨年度に続き、英語資格検定試験活用促進支援事業の対象となった。 ・生徒による授業評価項目4で「あてはまる」の回答は横ばい。(81-82%) ・ヴェリタスⅡの授業時間外で研究活動を行った研究グループは延べ138となった。80%以上の生徒が主体的に研究活動を行ったと自己評価している。 ・平成29年度の実施状況について、国語科は20単元、数学科は9単元、外国語(英語)科は19単元、理科は54単元、地歴・公民科は13単元、家庭科は1単元、保健体育課は体育で全単元、保健で5単元、芸術科は2単元だった。 ・全国英作文コンクールへの参加が定着し、3年生が3年連続入賞した。 ・「まなボード」は全教室で発表活動等で日常的に活用している。	・ルーブリック評価を軸にした授業案の作成(国語5単元、数学2単元、外国語(英語)19単元、理科6単元、地歴・公民3単元、保健体育2単元の合計35種類のルーブリック)が定着したが、授業で実際に活用する手立てをさらに研究する必要がある。 ・今後は、全教科での実施を進め、ルーブリックの質を高めた上で、「主体的・対話的で深い学び」による資質・能力の伸長について、評価・検証を進めていく。 ・英語による表現力の向上を意識した授業づくりがなされているが、若手意識の根強い生徒に対する指導法を教科で共有する必要がある。 ・TEAPや英検準1級などを受験する生徒が増加し、個別対策指導を制度として展開することを考える時期に来ている。 ・GTEC Speakingの評価は平均グレード3と低く、聴き取った情報に即座に応答する訓練を継続すべきである。 ・生徒による授業評価項目4の目標値達成に向けて、生徒が主体的に取り組むよう工夫が必要である。 ・英作文コンクールやスピーチコンテストへの参加者数をさらに増加させていく。	・授業研究発表会や授業評価での生徒の数値評価は数的に素晴らしい。 ・教員がルーブリック評価をどのように感じているのか調査するとよい。同じルーブリックを使用して、生徒との差異を分析していくとよい。 ・授業評価は記名式の方がよい。項目が同一であれば、生徒の経年推移をみるができる。	・授業研究発表会で新に保健体育課を加え、6教科の研究授業を実施した。 ・授業互見の習慣が定着した。 ・「主体的・対話的で深い学び」に向けて各教科でルーブリック評価を授業に導入し、良好な評価を得たが、教科による違いが見られる。 ・「英語運用能力」は上昇したが、生徒により課題がある。 ・GTECの受験率は100%、英語順準2級以上に相当する生徒は全学年97%だが、Speakingの課題が残る。 ・80%以上の生徒が主体的に研究活動を行った一方、授業評価項目4の目標値達成に向けて、生徒が主体的に取り組む工夫が必要である。	・ルーブリックの質向上及び評価・検証を進め、「主体的・対話的で深い学び」による資質・能力の伸長を図る。 ・英語力の向上に向けて、聴き取った情報に即座に応答する訓練など具体的な指導法を教科で検証・検討の上実施する。 ・TEAPや英検準1級など受験する生徒への組織的な対応を検討する。 ・生徒による授業評価項目4の目標値達成に向けて、検証と取組を更に進める。 ・英作文コンクールやスピーチコンテスト等参加への啓発を継続する。
2	生徒指導 支援	① 自主的に全体のために行動できる力を育成するとともに生徒自らが学習計画と学校生活のバランス調整できるよう組織的な支援体制を確立する。	① 部活動、学校行事などを通して生徒の主体性を育てるための取組を行うことにより、バランスの良い自立した社会人を育てる。	① 学校行事において生徒が主体となり組織的な計画・運用ができるよう支援する。また、相談活動の充実を図り、心身とも健康な学校生活を送ることができるよう支援する。	① 学校行事における生徒の組織的運営状況が向上したか。部活動への加入及び取り組み状況は向上したか。面談や情報交換など支援体制は適切であったか。	・体育部門文化部門について今年度も生徒による執行委員会を中心として、全校生徒が一致団結して取り組んだ。球技大会も新種目新ルールを大幅に導入し生徒主体に運営した。 ・部活動加入率 90% ・出場した関東大会以上の大会数 16 ・ケース会議等の開催回数11回	・戸塚祭執行委員会の立ち上げを早め、改善策を踏まえて企画を立てるよう指導する。 ・部活動加入率については90%前後を維持するよう生徒会による広報活動を継続する。 ・生徒が心身ともに健全な学校生活を送るよう、学年・教科との連携を密にする。また各学期にいじめ防止会議を開催する。	・関東大会出場は学業と部活動の両立の結果であるべきである。学業が中心で。部活動より学業のウェイトが高くあるべきだ。 ・部活動は、生徒の自主的活動を支援してほしい。 ・部活動加入率はもう少し上昇してもよい。	・戸塚祭では生徒の主体的な活動の進展が見られたが、職員に頼る部分もまだかなりある。 ・支援プログラムについては、一定の組織的な体制を整備することができたが、十分とは言えない。	・生徒支援グループの業務削減により、スケジュール管理も含め、生徒の自主的活動を支援する指導体制を構築する。 ・支援プログラムを内規として整理し、共通理解と円滑な運営を進める。
3	進路指導 支援	① 主体的学びから進路決定に結びつける進路指導の実現と各種模擬試験などを活用し、高い進路希望を諦めさせずに維持させ、高い進路実績を維持する。	① 継続的な模擬試験や面談などを通して、着実な学力の定着を図り希望進路の実現を目指す。また、自らの将来を見据え、第一志望校の決定とそれを実現するための支援を行う。	① 保護者に向けた情報発信の機会を増やし、学校、生徒、家庭が一体となった支援体制を構築する。また、職員研修の充実を図る。難関大学進学を諦めないための支援を充実させ、結果として難関国公立大学への進学が学力向上進学重点校としてふさわしい数値を達成するよう取り組む。	① 生徒対象及び保護者対象の説明会や面談が効果的に行われたか。その際、蓄積データが効果的に活用されたか。国公立大学進学者が100名、難関国公立大学進学者が20名を超えたか。	・生徒対象の進路説明会を8回実施(1年2回、2年2回、3年4回) ・保護者対象の進路説明会を6回実施(各学年2回) ・各学年とも3者面談+2者面談2回を全員に実施、必要に応じて、さらに面談を追加した。 ・各学年とも学年集会やHRを活用して進路実現に向け指導アドバイスを行った。 ・校内模試(各学年4回)を実施し、学年全体、各科目、個人について推移や年度間、他校比較など分析を行い、状況を把握するとともに、生徒個々に進路実現のためのアドバイスを行った。	・秋の保護者対象進路説明会は3学年同時開催なので、1学年を別日とする。 ・担任から、個別面談の時間確保が難しいとの意見があったので、授業確保とのバランスを考えながら、面談時間の確保を検討する。 ・7月の模試が野球部の試合と重なるなど、模試を十分に生かせない状況が生じたので、より有効に活用できるように、来年度の模試計画を配置した。 ・個別指導は、最終的には担任の指導に負うところが多いが、資料をより充実させ、システムとして確立する。	・国公立大学100名、難関大学20名合格は進路支援のパロメーターになるのか。 ・生徒対象説明会は自己実現の達成への支援が目的である。卒業時にアンケートを行い、自己実現が達成されているか調査するとよい。 ・大学の特徴をつかみ、地方も含めて教育力のある学校を紹介していくとよい。	・生徒対象及び保護者対象の説明会や面談、模試分析会などを定期的実施し、学校としての指導体制を構築することができたが、組織化された手立てについては、更に進める必要がある。 ・教科指導における数値目標として教科で共有し、データ活用を更に進める。	
4	地域等との 協働	① 学校間連携を進めるとともに、学校活動をいち早く公開し、発信に努め、地域の教育活動へ参画・協働を模索する。	① 広報活動を充実させ、教育活動のアピールを進める。また、生徒が地域で活躍できる場を拓き、地域に根ざした学校づくりを推進する。	① HPによる情報発信及び学校説明会や体験プログラムを通じた学校の魅力発信を行う。PTAや地域との連携を充実させる。また、生徒発表会や生徒派遣などを進め、地域連携を推進する。	① HPによる情報発信が適切に行われたか。学校説明会等の参加者に十分な情報提供ができたか。PTAとの連携が充実したか。生徒が地域で活躍する場が確保できたか。	・HP更新回数50回 ・学校説明会3回実施。延べ参加人数2,011名。公私合同説明会は約200名。説明内容は概ね好評であった。 ・体験授業を学校説明会と同日にした。参加者249名。 ・体験授業の申し込みをWEBで行った。 ・PTAとの会議を月1回実施し、円滑に事業を進めた。 ・小・中学校、地域の行事等で安全教育の実施、軽音楽部やダンスドリル部がイベントに参加した。	・HPは情報グループと連携し、充実を図る。過去の情報について整理する。 ・学校説明会は煩雑であったが、整理することができた。 ・体験授業の申し込み方法に混乱があったため、申し込み方法の改善と魅力ある授業を検討する。 ・PTAと連携し、事業の推進と会計処理等における事故防止に努める。 ・自治会や生徒会と連携し、生徒が地域で活躍できる場を提供する。	・説明会や学校へ行こう週間での参加と志願の相関関係はあるのか。	・HP更新は滞りなく行われているが、本校の魅力ある教育活動を発信する工夫が必要である。 ・学校説明会は精選することができたが、内容の充実を継続する必要がある。	・HPの充実に向けて検討する。 ・学校説明会について本校の体制を構築したので、今後さらに内容の充実を図る。 ・体験授業申込方法の改善及び体験授業の充実を図る。
5	学校管理 学校運営	① 信頼にねざした学校づくりに向け、事故防止の取組みを推進するとともに学校全体の企画調整機能を強化し、経営課題を横断的かつ組織的に検討し、教育活動の展開・拡充させる。	① 事故不祥事を起こさない学校づくりを進める。また、組織としての教育力向上を図る。	① 事故防止会議のみでなく、継続的な情報提供と意識啓発を行う。また、あらゆる場面を通して、組織的な教育力向上と、安全・安心な環境づくりを進める。	① 事故防止会議は月1度以上適切に行われたか。随時必要な情報提供が行われたか。生徒・職員の活力を引き出す学校づくりができたか。	・不祥事ゼロプログラムを策定し、毎月事故防止会議を実施した。 ・10月下旬に企画会議で中間検証を行い、9つの目標全てについて情報提供と注意喚起をした。 ・働き方改革に向けて課題を企画会議・サブリーダー会議・グループ会議等で検討し、13件の業務改善を図った。 ・教育環境について課題を集約し、電波時計設置、トイレの芳香剤、視聴覚座席修理など改善を進めた。 ・学校評議員会等で教育活動に係る情報発信を行い、助言をいただいた。 ・PTA等との連携を図り、トイレ・外灯など環境改善を進めた。	・来年度についても、事故防止会議等を設置し、事故防止に努める。 ・業務改善について引き続き課題を検討して改善を図るとともに、学校評議員会での助言を生かして教育力向上に繋げていく。 ・PTA等との連携を密に図り、安全・安心な教育環境整備を進めていく。	・教員の仕事は多岐にわたる。業務改善により軽減を進めてほしい。 ・環境整備について、PTAとしてできる限り協力していく。	・計画的に事故防止会議を実施し、情報提供及び注意を喚起し、一定の成果を上げることができたが、継続する必要がある。 ・事務・PTAと連携し、様々な教育環境改善を進めた。継続的な取組が必要である。	・事故防止の意識を定期的に啓発する。 ・事務・学校評議員・PTA・同窓会等との連携を図り、教育環境整備、教育力向上を更に進める。 ・今後予定されているトイレ改修、耐震補強などについて、業者と調整し、安全・安心な環境整備を進める。